

泣くということの研究のすすめ

上原輝男

一

鳴かぬなら殺してしまへほととぎす

鳴かぬなら鳴かしてみせうほととぎす

鳴かぬなら鳴くまで待とうほととぎす

御存知の通り、天下取りの信長秀吉家康のそのやり方、その態度その気性を言いあらわした歌とされて来たものである。これを誰が言い出したものか、どんな書物に出ているのか、おそらく誰も知らないだろう。もちろん、私も知らない。だが今は、その出典を問題としたいのではない。どうして、これほど根拠の不確実な歌を、多くの人々が、事もあろうに、

天下取り、もしくは天下統一の在りよう在り方とかかわる譬喩歌だとしてしまうのか、実はそちらの方が余っ程、関心を寄せさせられることである。

これから述べようとする小論にとって、天下の一大事をほととぎすの鳴き音におきかえられる――またおきかえられたことに同意出来る、我等日本人の感覚の妙から説き起こすべきだと考えたのである。

一体、鳴と泣との違いは、漢字が入る以前の日本語にとって重要なちがいはなかったとして誤りはない。誤りどころか、それを一つに感得できることが大切であるのに、漢字教

育を受けたばかりに、人間だけが、涙をこぼした状態を泣くという決めてしまう。動物はことばが無いから、動物から発する音声は全て鳴（啼）くである。こんな一方向的な解釈があつてよいわけではないが、鳴と泣との区別はこの程度ではないだろうか。そのくせ、赤ちゃんが動物同様に泣いていても鳴くと書いたら、いけないことになっている。動物だつて馬も犬も涙をこぼすのを見たことがある。こんな時は泣くと書きたくなる。万物の霊長たる人間様の勝手なことは今に始まつたことではないが、勝手気儘をいうより前に、漢字渡来以前の日本語のなくの原義は何だつ

たのかを知らねばならぬ。少くとも、日本語のなくはこんな動物差別の上にはない。牛や馬もなければ、小鳥もなく、同様に人もないたとしてよい。動物ばかりか、無生物でさえも、音を立てればなるであつた。くるとのちがいである。もつとも、子どもの頃、お手々つないで、野道を行けばの歌を歌わせられた時、靴が鳴るといふのは、抵抗があつたのは私ひとりだろうか。さはいえ、おならに、敬語がついてると面白がつた頃にはもう日本人であつた。山も鳴れば、海も鳴ると感得するのが日本人のセンスであつた。なく、なるのちがいこそあれ、その本体の音（本音）と聞くからこそ、次のような歌も生れるべくして生まれている。

いさなとり

海や死にする

山や死にする

死ねこそ、

海は潮干て

山は枯れすれ。

（万葉集第十六）

民俗学では、なは後天魂（成長につれて体内に宿りこむ新生活力・新生命力）だという。（石上堅説）子守り歌の多くが、泣かずに眠らせようと歌うのは、体内に宿る魂の放出を防ぐためであつたということになる。それに命名するからやつぱりな（名）であつたのである。寝る子は育つという諺も、これで頷け

る。なの充実を思うからに外ならない。

ここでは、何も民俗学をいうことを目的とはしていない。しかし、現代人の泣くことに関する知識と感覚は、あまりにも粗雑であつたといえないだろうか。生きとし生けるものの、生命象徴を根とし音とし、音を上げるをなくと把えて来た我等祖先の感覚をもう一度よみがえらせることをしないで、教育の復権は望むべくもない。生命尊重という標語は知つていても、生命観の何一つも教えられない、またその実感から程遠いところで、現代の教育は用意され語られている。今どきの人は、子どもを教育して一体何を期待しているのか。

戦国の世の中にあつてさえも、人々は、その天下人をほと、ぎすの音を鳴かしめる在り方において評した。そうすることにおいて、冒頭の歌は世人に共鳴するところとなつたということだけはまちがひなく言えるのである。

二

先の「音を哭く」という言い方は、万葉集の中に随時に見られる。万葉人たちは音（根）を哭いたにちがいないのだ。くだくだしい説明をするのがいやだが、心の音（根）として泣き、またそう聞いていると思うのである。つまり、泣くということばとしての概念以前

の声音に感情を聞きつけている。だから心根は心音と一つだったといえるのである。

事、一大事に到る時、いやそんなオーバーな言い方をせずとも、今どきのピンチでもよい。そんな時、今でもよく根性という。やつぱり、日本人にとって、失いがたいのは、ね（根）であらわされる感覚の基本構造だといえる。これを基本にしているから、ほね（骨）、すね（脛）、やね（屋根）、きね（杵）等の語が生まれているのだ。この感覚は人にも適用されているのが、心根であろう。人間性などという西洋概念を教えられる以前に、われわれ祖先は心根を感得していた。そしてさらに素晴らしいのは、人間性が、最大公約数的既知抽象であるのに対し、これは、活力の根源としての未知具象であつた。

現代人は根に不動を思いすぎる。元来、根はもつと活動的イメージであつた。だからこそ、その運動として音を聞くことが出来たといふべきなのである。記紀に伝える神功皇后の琴を弾き、武内宿禰を審神者として神意を伺う話も、事態の根・元は琴の音に発動するものという感得を前提としていなければならぬ。

万葉集における、音を哭くは、そのことが漸く忘れられ、なおかつ、その感覚を留めた殊更なる言い方ではなかつたらうか。

なくは、心根自体の働きであつたとすべき

である。

近代に入って、理性は感情よりも価値高きものとされ、知識層は理不尽にも、感情を軽蔑することとで理性派を粧った。この理不尽なる用語は理性という概念の輸入以前からのもので、おそらく、無理が通れば道理がひっこむ式の道理が尽されていないということ、それまでの日本人は理もまた感情を分母としていたといつてよい。日本の芝居で、身につまされる時の常套のせりふは、道理じゃ／＼という。感情が納得する時、道理に叶うのである。

これほど感情一辺倒の日本人であるのに、学校教育の中では、その正当性を問われることは無かった。知育優先を立場とする限り、感情は邪魔ものであるか排除されなければならなかったからである。このことは今日においても殆んど変っていない。最も基本的ともいうべきその不可解な一例を上げると学校教育のカリキュラムの中にその土地、土地の祭礼をとり込んだものを知らない。なぜ、祭礼は学校教育者の埒外にあるのかを考えてみると、今日までの学校教育の体質が知れるというのである。学校は亡んでも祭礼は亡ばない。学校ざらいの子はふえても、神輿かつぎの女性志願はふえるばかり、世を上げて芸能呆けしている時代である。ただ芸能にもはやりすたりがあつてテレビ番組に浪花節など敬老の

日でもないかぎりかからない。若い人は、くさいという。田舎くさいとかださいとかいうそれを言っているのであらうが、よく考えてみると、その取捨選択はそれほど本質的差異はなさそうである。むしろそれをそうと感じさせる体質がまだまだ新人類にも残っていることにならないだろうか。極端に身震いするほど気持ちが悪くなることまでいうに至っては、却って、同体質であることを認めているように思うがどうであらう。同体質であるから、身震いする。それを反撥というか共感というかは今問うていうことではない。それに相変らず艶歌と称する歌語りはますます盛んであることを思えば、日本人の体質はそれほど変わったと思えぬのである。艶歌は浪花節の時代変化であることを御存知ないだけの話である。

また逆に同じ体質を歌い上げるから、紅白歌合戦が年中行事化して、とかくの批判があつても、NHKはこれを変更できない。

内容は何か、大同小異で泣きと涙が主要テーマであることは言うまでもない。しかし、本当は、テーマでも何でもない、感情を分母とする日本人の体質が音を上げているのである。あれほど暴力団追放をいう現代人が、カラオケとなると、やくざの歌を歌うかと思えば、良家の子女が酒場の女の歌を歌う。悲恋、別離、だけを泣きと涙で綴っているのではな

い。青春、人生、運命、何を持って来ても泣きと涙を必要とする。もし、これが本当なら、現実的にももつと涙をこぼしている人間を見かけそうなものだが、そうはならない。顔で笑って、心で泣くを実行していることにしておこう。とにかく、唐獅子牡丹のやくざも将棋さしも、柔道家も、バスガールも、大島のアンコも、船乗りも、相撲とりもみんなみな泣くことになっている。

リングの歌で戦後は始まったといわれる。リングの気持はよくわかるといったほどの日本人である。何も驚くことはないが、これで無理を感じないのは、感情を分母とする感情の論理を持つている証拠と認めないわけにはいかないのである。

阿久悠作詞、三木たかし作曲、石川さゆり唄の「津軽海峡冬景色」が流行した時、典型的な現代浪曲だと思ひ、なおかつ、泣いていました。津軽海峡冬景色」と主情を形式的には完全情景描写に転じているところが面白かった。昔、文部省唱歌に「冬景色」という名曲があつた。ひまがあれば比較してみるとよい。そして、なぜ、前者が艶歌で、後者が文部省唱歌なのかを。

それは決して、津軽海峡の特定条件が決定的だということではなくて、やっぱり「私もひとり連絡船に乗りこえそうな鷗見つめ泣いていました」と語るところが味噌なのであ

る。

ごらんあれが竜飛岬 北のはずれと

見知らぬ人が 指をさす

息でくもる窓のガラス ふいてみたけど

はるかにかすみ 見えるだけ

ああ、津軽海峡 冬景色

右は、同じ歌の二番の一部分を省略して示したが、こうしてみると、艶歌としての効力は殆んど失せてしまうことがよくわかる。

三

さて、以上述べて来たようなことで、日本人が泣くということがいかに根深いものであるか、またそれは現象行為というより、心意伝承に裏付けされた行動伝承であることがわかりただけだろうか。決して、以上述べて来たことは、日本人は浪花節的だなどいいたためではなかった。私もは、二十余年間、子どもという生きものが、人の子として、どのような生活現象を示し、その生活現象をどう変化させることを成長というのかを、私もなりに写しとろうとして来た。その研究態度は今も変りはない。たとえば、今回も子どもが泣くということをテーマに掲げたのも、子どもが泣くことは、欲求不満の発信とか、幼児期の後遺症的現象とする常識めいた考えを一切捨てて、子どもが泣くということの意味を求め、なおかつ、その現象変化

を感情の分化、もしくは感情の織りなし方として、把えてみようとしたのである。このことは、何も子どもだけに限られることではない。先述の艶歌の場合でいうなら、それ相應の年令段階が想定していることを考え合わせれば異論はあるまい。まさか「津軽海峡冬景色」の「私」に、四五十代をイメージすることはできない。だから、泣くことは、年令相當のイメージがつきまとうことになる。さらに、その人が、どんな場所で、どのように泣くかによって、その人なりを判断する。その人なり、人がらを判断するのは、「泣き」だけによるわけではないが、その人がどのように泣くかは、何よりも、決定的である。泣く当事者よりも、それを見ている者がそう思っているのだから、考えてみると、何とも空怖しい人間現象であったのである。人間とはやつぱりこうした感情交換観察を主とする人間関係であった。

人は決して自由には泣いていない。創造的にも発明的にも泣けない。ひたすら伝承において、その感情分化と、それに伴う感情の織りなし方でしか泣けない。泣くもんかと思っても、涙がこぼれてしまう子もいれば、泣きたくても泣けない子もいる。このことは、大人においても言える。ただ、大人においてはそれまでの経験から、場合によって泣き方の適応を考慮することがある。しかし、またそ

のことを含めて、個性、人間性の何よりの評価基準とされたりする。考えてみると、何ともはや、人間存在とは案外、手短かなところに手がかりがありそうである。少くとも、子どもの段階で、このことを観察するのは、それほど複雑で困難だとは思われない。彼等たちは、正直に、精一杯に感情の曲折の最高限度を示してくれる。つまり、彼等にとつては、感情を開放し、告白すること、既述した語でいうなら、身体の質の本音を上げることに、彼等の成長はかかっているからであった。

一人ひとりの子どもが、今ある段階で泣いているということは確かである。一年生には泣くという意識とその構造化がどこまで進んだか、あるいは、その子が泣くということについて持っているこだわりの構造、あるいは偏向ぶりを探がし出すことも大事だが、そのためにも、教師集団は、もっと大事な、子どもも大人も含めた人間感情の基本的体感の全体構造を仮説でもよいから知っておかねばならなかったのではないだろうか。子どもはすぐくすぐ、伸びやかに、豊かにと、教育関係者は合言葉のようにいう。肉体発達は目で把握られるから、それでよいが、しかし精神の伸びやかさ、豊かさは、何を目安にするのか。今日の教育目標が見定められぬのは、掛声ばかりで、その直接対象が確定されていないからだということも、今回の研究調査中に気づ

くことが出来た。

ある条件を整えば、人の涙が感動を誘うのはどうしてなのか。美しいとも、清らかであるとも、ある場合においてはそれこそ人間的豊かさを思わせられるのも、人間の泣くことをめぐってであることの、解答を得なければならぬと考えたのが、「子どもの作文に見る「泣き」に関する精神構造図」であった。（本誌該当論文参照）

四

上記の「子どもの作文に見られる「泣き」に関する精神構造図」がどのようにして得られたかについて、本研究会としても、当時の記録を残しておきたいと思うので、この図表を得た直後の筆者の感想のテープを、略々、忠実に、転記する。

「我々は今回の合宿の成果というものは大変なものだと思うんだけど、あの——全体的構想というものを予め考えて泣きの研究に入ったわけではなかった。こんなこというと非常に無責任なようだけれども、勿論、児童の言語生態研究という大きな見地から、とり扱うことにはちがいないが、しかし、泣くという現象をどんなふうに（目的と方法において）つかまえるかについては、はじめから、何かこちらが何か、思いつきを掲げて始める研究はとるべきではないというふうに思っていた

し、子どもたちの実態を整理することから答を出して行く——以前からの我々の方法、やり方であったわけです。

ところが表が出来上り、そしてまたもう片一方で、夕日作文という傍証を加えてみて、本当に、今日の午後は一時から、正式には一時四、五分ぐらいから始まったと思うけれど、この席に座ってから私の頭に出来上った整理のホヤホヤなんですけれども、あの——全体的構図がわかって来たということなんです。それは、あそこ（図表）を見てもらったよろしいことではありますが、言いたいことは

我々の泣きの研究は、ああいうことであったのだということ。子どもの作文を整理して、やっと全体を見たと思うのです。結果的に、我々はああいうふう（図表）に整理したんだけど、泣きというものを側面から見たら、確かにあれでいいですね。あれでいいというのは、あれが確かかどうかかわからないけれども、大体、子どもたちの現象を整理してみたらああいう型になったのだから、そのことにおいて私は感動する。つまり、人間にとつて、泣くということが、どういうことだったのかを、この表が改めて私たちに呼びかけて来るということだ。あの中での一番の大きな項目はね、私は大発見をしたような気にさせられるんです。（泣くということとは）浄化作用なんです。やっぱり、浄化作用と

いうことを人間が起しているということなんです。そういう観点が必要だったということ強く思いました。

一時に、ここに集合がかかるまでは、我々児童態におきましても、私自身においても、泣くというものを困難だとか苦境だとか、あるいは極限状況というものの、破綻現象（この場面、まだ連環的に扱えられていない。自滅と同意的に考えている）というふうに考えていたのです。それが我々の基本的な姿勢だったと思うんですね。

ところが、人間がある種の困難、あるいはある種の苦境に立つて、それが破綻（自滅から緊張が解ける）を起こして来る。その時に人間は泣くというふうに考えていたのだけれども、これでいて、少しずつ、芽生えかかっているものがあつたのでしょう。つまり、極限状況へ向かい、その緊張が破綻する時に泣きの現象が起ると。（これは泣くという現象が精神緩和の引金になるのか、因果関係は不明）とにかく連環的に考えねば、泣きたいんだけど泣けないとか泣きたくないと思っているのに泣いてしまうという子どもの言い分を解くことが出来ないことに気がつき始めたのです。また、市山さん（市山仁美）が提出した哭と泣とは違うんだという（問題解決も）、違うというよりも、哭と泣との区別を、区別するだけでなく、一連のものの中で扱えられ

なければいけないという発言もすでに出ていたから、自ずと我々の頭は、(単発的現象としての観点から連環的イメージ運動として) 転換しつつあったのかもしれない。で、私はさらにそれを引っぱって、それは心なぐしくなる。心が穏やかになっていく過程だと考え、なぐとなくと、なくは声を上げてなぐの場合というふうに一連のものではなかったかというふうに着想は徐々に生まれつつあった。そして、それはもつと大きな観点に立つて、人間はかならず浄化作用を起こす動物であるように思えて来たのです。だから、泣くは浄化作用の過程現象だとすべきなんだとわかって来たのです。泣くは、人間の困難や混乱混乱からの浄化への復元運動と考えてみると、もう動かし難い見地のように思えて来たのです。それこそ、まさに神様が人に与えて呉れている摂理のように思われて——それにどうして今まで気が付かなかったらう——そんな気さえて来ました。何か神がかって来たように思われても困りますので、もう一つ、傍証として扱おうとした夕日作文が、この鍵にもなっていることを申し添えねばなりません。

この夕日作文採択の発想は、泣くという問題を現象的にばかり捉えよう捉えようとばかりしているから、なかなか、本来の泣くことの意味がつかまえられなかったので、(発想を

転換して) 泣くというのは声を立てて泣くじやなくて、その気になるイメージを探がしてみてはどうだろうと思ったことに始まる。勿論、その頃は、まだ結論めいたことは、まだ何もわかっていなかった。けれども、泣くは一過性の現象研究では何もわからない。心がなぐしくなっていくその過程現象としての観方へと導かれて行ったということなんです。そして不思議なことに、夕日というのは、まあ、下級学年の方では、「朝日と夕日とが一緒になってしまっているものでもないではない、あるいは、夕日は活力を与えるものというよな、私の予断を許さぬものも出て来もしましたが、それは上級学年になるに従って、それは困難や混乱から平静へ帰ろうとするものなんだというふうになる。

これは、生活経験的に、夕日を見て、家路につくという習慣からかとも思うが、それにしても、軍歌の『戦友』の赤い夕日の満州ではないが、戦いすんで日が暮れて、戦友を探がしに戻るといふのは、我々のイメージ運動にそういう復元的連環性があつて、夕日がそれを刺激しているのかもしれない。だから、夕日がふるさとと一緒にあったり、回想とか懐旧の情とかに重なるというのは、これは当然のことだったと言わなきゃならんということ。

他に、夕日の中に事件をからませて来ると

いう作文がありましたね、葛西先生ところの作文の中で出て来た。お兄ちゃんとお母さんが喧嘩していた。中(家の)に入ったら大変だと自分は外へ出て夕日を見ていたという。そして、その夕日を、あの人たちは見りやよかったんだという。そしたら喧嘩などしなくてすんだというのだから、夕日の浄化作用をいうとするなら、まことに好都合な作文でした。さきほど、「顔の中の赤い月」という題のなかなかの名作があつたと言いましたが、いま一つ、小説を思い出しました。「夕日と拳銃」というこれも秀作でした。テレビドラマにもなったと思うんですが——それは夕日がやっぱり事件と重なって、そしてそれが平静へと復元して行くのです。(今も放映され続けている長寿番組『特捜最前線』のラストシーンのカットバックは、確か夕日であるのはこのパターンだと言えるでしょう。)

この次、発刊する我々の雑誌には、小学生における、泣き方の特徴なり説明なり、あるいは分析なり、泣きの構造というものを取り扱うわけなんだけれども、これは、本来、子どもの感情生活における、あるいはもっと大きく、人間存在における浄化作用についてというのが本題であるべきで、そしてその副題として、泣きと夕日の研究だったなと思いましたがね。いかがでしょうか。」

(玉川大学教授)